

七不思議を消去せよ

今回の原案・葛 作・風間銀灰

注意事項

著作権は放棄していません。
二重配布、作品の無断借用等をご遠慮ください。
本作品は、ブログにて連載したものを編集し、掲載しています。

やわらかな日差しが窓辺に漂っていた。高く澄んだ青空には、赤トンボが飛んでいる。とても気持ちのよい日だ。...授業さえなければ。授業を嫌がるのは、なにも学生ばかりの特権ではない。教える側にとっても苦痛な時もあるのだ。つまり、私は教える側、この大学の助教授で、毎回授業で失笑されているのだ。

ご存知でない方のために説明しておく、私は英米文学を(一応)専門にしている名ばかりの助教授である。「クラシックミステリー史」なる授業をチャレで開講してしまっ

てから、失笑を買うばかりか、事件に巻き込まれてしまうことさえある不幸な中年男だ。

そこへ、どたどたと重そうな足音が近付いてきた。

「セーンセっ、いらっしやいますか」

声の主は鳴戸。厄介事を持ち込む学生の一人である。

私は驚いた。この男、鳴戸は、もう五分もしないうちに始まる授業を受講している学生だ。何故今わざわざここ研究室へ来る必要があるのか。迎えに来てくれたつもりかもしれないが、こんなむさ苦しい電気街の似合う男の出迎えなどいらない。

「いったい何の用だ。どうせ間もなく教室で会えるだろう。」

「いえ、今日授業でやってほしいテーマがあって、お願いに来たんすよ。...どうせ今日の先生のテーマ、やっつけでしょ？」

悔しいが凶星だった。ネタが思いつかず、苦し紛れに「冷戦とスパイ・ミステリーの因果関係」などという、自分でもちんぷんかんぷんなテーマを用意していたのだ。「そんなの放つって、今日はこのテーマにしてくださいよ。『学校の七不思議』って。」

「なんだと？」

怪談話とミステリがどうつながるのか。怪訝な顔をする私に、彼は説明を始めた。

「...いやあ、実は、昨日オカルト研究会の齊藤と議論になっちゃったんすよ。怪奇現象に説明がつく、つかないで。...で、齊藤の奴、とりあえずうちの学校の七不思議を、論理的かつ科学的に説明してみろって言いまして。理工学部の自分としては、オカルトなんかには負けたくないんすよ。」

「それが私のクラシックミステリー史の授業とどう関係するんだ？」

「だから、次の時間の授業、うちの学校の七不思議をミステリー史のみんなで検証する、って時間にしてくれないっすか？齊藤も来るんで。」

人の授業をなんだとやってると言いたいところだったが、あいにく私のテーマより面白そうだった。

「仕方ない、次の時間は提供するが、その代わりに君が仕切るんだぞ。」

「そんな事言っ、センセもラクできてラッキーでしょ？」イヤな奴だ。そのとき、始業のチャイムが鳴った。

クラシックミステリー史の授業は、私がやっつけられるのが面白いせいか、かなりの学生が受講している。今日も大教室はほどほどに埋まっていた。鳴戸は大人数にも全く臆することなくホワイトボードの側に立ち、説明している。

「...と、いうわけで、七不思議の“真相”をみなさんでぜひ推理してほしいっす。センセもよろしく〜。」

居眠りでもしていようかと思っただ、アテがはずれた。

「ではでは、知らない人のためにうちの学校の七不思議を簡単に説明しまーす。

其の一、科学棟の標本の怪。

其の二、芸術学部の音楽室の肖像の怪。

其の三、図書室分室の怪。

其の四、体育学部の水道の怪。

其の五、大講堂の謎の声の怪。

其の六、旧文学棟女子トイレ鏡の怪。

其の七、屋上の人影の怪。

まずは、其の一の怪から検証したいと思います。」

この学校の七不思議は、噂でちらりと聞いたことはあるが、全部聞くのは初めてだった。本当に七つ分話があるとは知らなかった。

「其の一は、ご存知相当古い建物で有名な科学棟で、研究で居残りしていたある学生が、夜中に廊下を歩き回る人体模型の標本を目撃したというものであります。見て、それからどーしたという話がないところがいかにも怪談チックっすね。...ご意見ないスカ。」

すると、鳴戸といつもつるんでいるやはり理工学部の大海原が手を挙げた。

「大海原君、どーぞ。」

「考えられる可能性はいくらでもあります。」

大海原は、ひよろ長いという点では鳴戸と異なるが、やはり電気街がよく似合う男である。

「...てゆーか、それ、絶対、模型制作サークル、通称プラ模研の仕業ですよー。ガ○ダムや女のコの等身大フィギュアだけじゃなくて、等身大スプラッタ模型とか、からくりほねほね君とか作ってんの、見たことありますもん。部室確か、科学棟だし。」

この大海原の意見に、「なーんだ」とか、「そーいやヘンなの作ってんの見たことある」とかいう声が相次ぎ、こうして其の一は“プラ模研の仕業”で落ち着いた。

「では其の二に移るっす。音楽室のベートーベンの肖像の目が動くのを、何人もの学生が見たという、全国でよく聞く事例っすね。」

気のせいだろうとかぱっとしない意見が出た中、英文科の女子学生田沢が手を挙げた。

「目が動くのを目撃された時間に注目してみるのはいかがかしら？」

田沢はまあ美人と言っていい顔なのだが、気が強いうえに妙に古風な喋り方をするのだ。

「確か全て日没後ですわよね。つまり、音楽室の窓のちょうど正面にある、放送棟のライトが点灯してる時間、ということですよ。」

「田沢さん、どーゆーコトっすか？」

「ニブい方ね。点滅してるライトが肖像画を照らすと、動きのある陰影ができて、それで目が動いたような錯覚をおこしませんこと？」

なるほど、と皆が感心した。説得力がある。

皆が田沢の意見に納得したので、其の三に移ることになった。

「えー、図書室分室の怪というのは、試験勉強で一人図書室分室に残っていた学生が、誰もいないはずの書架の裏からの物音を何度も聞き、その度に確認しても何もいなかったという、なかなかホラーな現象っすね。」

「典型的なラップ音ですよ。説明つきませんか？」

噂のオカルト件の齊藤が、確信顔で言った。

「まあ待つっすよ。ご意見よろしく。」

すると、天然不思議系少女、国文科の楠が手を挙げた。

「ちょっといいですかあ？ あの部屋、よく使うんですけどお、別に物音しても不思議じゃないんです。...だって空調の下に、木の棚があるんですもん。他に置くとこないから置いてるんですけど、あれはひどいです。木だからあ、空調で膨れたり乾燥したりでぱきっ、ぺきって。棚がかわいそうです。」

ようするに、乾湿による、木の膨張と収縮が物音の原因だということも楠は言いたいらしかった。だが、本人はむしろ棚がかわいそうだということの方が気になるらしい。

「はいはい。じゃ、其の四に行くっすよ。この水道の怪というのは、体育館の裏口の外にある水道が、何度栓を止めても水が出てるといものです。修理もしてるらしいのですが、いつの間にかまたたれてるそうです。」

すると、史学科の超越(こしごえ)が手を挙げた。

「実は、あの水道...相撲部がよく使うんですよ...。」

これ以上の説明は必要あるまい。超越は趣味で空手サークルに入ってる、帰りによく体育館の側を通るそうだ。...確かに相撲部の連中の怪力では、いくら直してもムダだろう。体育学部の水道の栓は堅くした方がいいかもしれない。

「今のところ、テーマが怪談なのにさっぱり怖くないよなー。」

誰ともなく呟き、教室中にゆるい空気が満ちてきた。

そのゆるい空気をどうにかしようとするべく、鳴戸が声を一段と大きくした。

「じゃ、其の五へいくっすよ。大講堂で、学祭の時に著名な先生をお呼びして、その講演を録音した際、後に再生したら、あつてはならない声が入っていたという...」

怪談らしくなってきた。全員が固唾をのんで続きを待った。

「なんて入ってたんだ？」

おそらく全員が、呪いの言葉とか恐ろしいものを連想し

ていたに違いない。

「それが...『カツラカツラカツラ』って。」

「かつらあ?!」

「これが問題のテープス。」

再生ボタンを押すと、中年男性の声に混じって、何かの音が聞こえた。

「...このような反応を見ながら、研究者たちは...」という声の裏に、確かに「カツラカツラカツラ...」と聞こえている。

「この講演の著名な先生って、もしかして、不自然に黒い頭の○×先生じゃ...」

○×先生はとある分野の権威だが、その研究成果よりも、「時々ズレる不自然な黒い頭」で有名なだった。別の意味で恐ろしいので、とてもここに名前は書けない。

「これ、100%、録音機の側にいたやつが無意識の呟きじゃねーか！」

と、皆でツツこんだところで、次へ移ることになった。

万が一本当の霊の声だとしても、あまりにも怖さに欠けるので、さすがの斉藤もこれ以上掘り下げようとしなかった。

「其の六一。現在改修工事中の、旧文学棟の女子トイレは、夜中に入ると、鏡に将来の結婚相手の姿が映るという噂があるっす。女の子はこーゆー話、好きですよね。」

ところが、女子の反応はイマイチだった。

大学生ともなると、鏡の中の「彼」が、年収どれぐらいかの方が気にかかるらしい。

旧文学棟？ふと、私の記憶の琴線に何かが触れた。

確か、あそこは...。

「みんな、すまん。」

私は立ち上がって言った。

「その噂の元は、たぶん私だ。」

「はい?!」

全員が、“信じられん”という顔をした。

「どーゆーコトっすか？説明してくださいよ」

「いや、実は...」

妻と知り合ったばかりの頃の話だ。その頃、私の研究室は旧文学棟にあって、当時まだ学生だった妻が、たまたま友人何人かと遊びに来ていた。そしてだいたい夜もふけて、彼女が一人でトイレに行ったのだが、間もなく闇を切り裂くような悲鳴が聞こえてきた。そのとき、私はとっさに、女子トイレということも忘れ、悲鳴のもとへ飛

び込んだ。だが、悲鳴の原因は、曲者ではなく、...カマドウマだった。妻は、カマドウマは死ぬほど苦手だったのだ。私がカマドウマを追い払うと、妻はようやく落ち着きを取り戻した。が、今度は逆に、女子トイレに入ってしまったことに気付いた私が慌てた。だが、妻は、鏡越しににっこり微笑んでくれたのだった...。

「えーっ、それがセンセ夫婦のなれそめっ?!」

「悪いか、女子トイレの鏡が縁で結婚して。」

「鏡ですらなくて、カマドウマじゃないスカあつ」

妻が、よく友人たちに、

「私、鏡と一緒に映ってる姿を見て、“運命”だと思ったのよ。」

と、冗談めかして言っていたのだが、おそらくそれが噂の元になったのだろう。これで、七不思議はあと一つとなった。

「あ〜、センセの馴れ初め話で、な〜んかテンション下がっちゃったっすね...。」

「それはどういう意味だ？」

「はいはい」

鳴戸は私の抗議を無視した。

「じゃ、最後、其の七っす。研究棟の屋上、今フェンスが張ってあって、入れないようになってますよね。噂では、ノイローゼで屋上から飛び降りた学生がいたそうです。で、それ以来、屋上は立ち入り禁止になったけれど、その入れるはずのない屋上に、たまに人影が佇んでいるという...。目撃者も多数だそうです。」

「屋上への入り口は？」

「らせん階段しかつながってなくて、その手前がフェンスでふさがれているんですよ。

つまり、人は入れない、ということっす。」

すると、何人かの目がいきいきとしてきた。

「と、ゆーコトはつまり...」皆を代表してか、大海原が呟いた。

「これって、密室パズルってことですよ！」

屋外なので、密“室”と言っていいかの疑問は残るが、もし人為的に起こした現象ならば、確かにトリックが存在するだろう。

「よーし、このトリック、必ず解いてみせるっすよ！」

はしゃぐ鳴戸には気の毒だが、もう授業の残り時間があ

まりなかった。

「お楽しみのところ恐縮だが、今日は時間がない。続きはまた次回だな。」

私の言葉に、皆不満そうだったが、やむを得まい。

と、思ったら、鳴戸が提案してきた。

「お時間ある皆さん、課外授業といきませんか？」

鳴戸の提案はこうだった。

どうせなら、その“人影”が目撃される時間に集まって、トリックをときましょう、と。

「じゃ、説明がつかなければ、怪奇現象として認めてくれるんですね。」

と、斉藤も妙なファイトを燃やしていた。

「そうか、まあ頑張ってくれ。」

私は今日夕食当番だから、参加できないが。」

若者と違って私はヒマではないのだ。

だが、鳴戸は容赦なかった。

「何言ってるんスか、当然センセも参加っスよ。」

教官が付いてなきゃ、進入禁止の屋上付近でわいわい集まれるはずないっしょ。」

「勝手にやってくれ。とにかく今日は、私は帰るぞっ。」

そのとき、奇しくも携帯のメール着信音が鳴った。

...妻からだ。すごくイヤな予感がする。

『ごめんね、今日は印刷所のトラブルがあって帰れないかも～。悪いけど夕飯適当に済ませてくれる？終わったら TEL するから迎えに来てね～』

...つまり、深夜までヒマになってしまったのだ。

それを知った時の鳴戸の顔ときたら。文字どおり「にやり。」だった。こうして、ある意味“季節外れの肝試し”に参加するハメになってしまった。つくづく運がない。

集合時間までの間、私はヤケになって夕食を「ぎゅうどん定食」に決め、正門徒歩一分のうどん屋に行った。この定食は、牛丼とうどんがセットになっている。カロリーが気になる中年には少々栄養バランスに欠ける品である。構うものか。妻と楽しい夕食ができないうえ、屋上の幽霊退治に引っ張り出されてしまうのだ。これくらいは許してもらえらるだろう。

集合場所の研究棟最上階エレベーター前に着くと、鳴戸や斉藤を筆頭に、かなりの人数が集まっていた。つまり、用事がある者や家が遠い者以外は集まってしまったのだ。しかも、オカルト研究会の連中まで来ていた。

本当に幽霊が居たとしても、こんな賑やかさでは出て来にくいだらう。

全くヒマ人が多い学校だ。集合時間がくると、鳴戸が手を振って皆を静かにさせた。

「皆さんにご報告しておくことがあります。先ほど学生課に問い合わせたところ、創立以来屋上から学生が飛び降りた事実はないそうです。また、それらしい新聞記事もピックアップできませんでした。つまり、ここは無関係な霊か(霊が実在するなら、スけど)、もしくは誰かのいたずらということになります。俺はいたずらだと思っ

ます。さあ、頑張ってそのトリックを解くっスよ！」
とはいえ辺りはすっかり暗くなっており、錠のかけられた屋上へのフェンスが、風でかたかたと音をたてる他は、何の気配も感じられなかった。明るいうちに集まった方がよかったのではなからうか。これでは調べようもない。そのときだった。

「あっ、あれは何?!」

誰かの声がし、見ると、フェンスの向こう、入れないはずの屋上の奥に、何かぼうと光っているのが見えた。

さあ大変なことになった。騒ぐ者、写メールを撮る者、身を乗り出す者、「落ち着けー」と言いながら一番慌てふためいている者、などなど。なんせ屋上はフェンスの向こうなのだ。近寄って確かめようもない。オカルト研の斉藤は、ここぞとばかりに張り切っていた。

「これこそ霊現象が実在する、れっきとした証拠ですっ！」

と、周りの喧騒に負けない声で叫んでいる。鳴戸が渋い顔をして、近寄ってきて囁いた。

「ちょっと、センセ、あれ、どーゆーコトっスか？忍者でもなきゃ、屋上入れるわけないから、斉藤たちの仕業とも思えないし...」

私に聞くな、と言いたかったところだったが、とりあえずその“光るもの”を観察してみた。それは、一カ所にじっとしたまま、ときどきふらふらと左右に揺れている。人の形のように見えなくもない。だが、ふと私はあることに思い立った。そして、騒ぐ皆を残して、下の階へ向かった

“光るもの”のあるとおぼしき場所の、真下の部屋の入り口にたどり着くと、私はまず扉越しに耳をすました。

「もうちょい引っ張って」

「手離すなよ」

そんな声が、かすかに聞こえる。私はノックもせずに扉を開け放った。すると、窓際に立っていた数人が、驚いて振り返った。斉藤以外のオカルト研のメンバーだ。

手には、糸状のものがしっかりと握られている。

「屋上の真下の研究室を、オカルト研の君たちが、ゼミで何人か出入りしているのを思い出してね」

私は言った。

「トリックを仕掛けるとしたら、この部屋だろうと思ったのだ。さ、上に戻って、皆に素直に謝ったらどうかな」

すると彼らはしょんぼりとうなずいて、糸状のものをたぐり寄せた。それは、いろんな形の風船を組み合わせて人の形みたいにし、蛍光塗料を表面に吹き付け、空気より軽いガスをつめたものだった。

正体がオカルト研の仕業とわかって、全員が気が抜けたりがっかりしたりした。トリックが単純なものなので、なおさらだった。

「つまり、光る風船の糸を長くして、下の階の窓から浮かせることによって、屋上に何かがいるように見えたんすね。...すぐ気付かなくて悔しいっす。でも」

急に鳴戸は元気になって、

「これで七不思議全部説明付けたっすよ。さあ、斉藤、負けを認めるんだ。」

すると、斉藤はうなだれながらも反論した。

「確かに、今日のはいたずらだけどさ...。でも、今まで目撃されたのは、俺たちじゃないよ。今日のだって、名探偵気取りのおまえたちが、どんな理屈つけるか知りたくてやったんだし」

それから私をちらりと見て、

「まあ“名探偵”先生にすぐバレちゃったけどさ...」

「往生際が悪いっすよ。ね、センセ。」

「いや」

私は首を振って言った。

「理由が付いたからといって、イコール霊は存在しない、とは限らないぞ」

「ええっ」鳴戸は口を尖らせた。

「センセはどっちの味方なんすか?!」

「もちろん逆もまたしかり、だ」

私は続けた。

「光るものとか、謎の音がイコール霊だ、と決めつけるのもよくないと思う。光るものはあくまで光るもので、音も

説明のつかない音、それ以外の何物でもない。不思議な現象、ではあるが、人もしくは動物の霊魂であると科学的に証明されているわけではないんだ。怪奇現象に説明がついたからといって、それが即刻霊の否定にはならない。逆に、怪奇現象が起きたからといって、それがすぐに霊の存在の証明にはならない。...これが私の結論だな。つまり、二十一世紀に生きている我々にはまだわからない、と。」

鳴戸はまた口を尖らせたが、すぐ笑顔になった。

「しょーがないな。じゃ、今回はドローってコトでどースか、斉藤。」

斉藤もにやりと笑って言った。

「今回はな。でもそのうち証明してやるよ。」

こうして、七不思議の解明は今回はとりあえず終わりとなったが、いつか、今日のことを忘れた学生たちが、また新たな不思議を見つけ、伝えていこう。科学が進んでも、怪談話が面白いということに変わりはないのだから。

「あ〜あ、今回は鳴戸くんたちに振り回されちゃったみたいで、損したですう。バイトお休みしてまでここに来たのにイ。」

楠がぼやいた。

「悪かったっす。お詫びにおごるよ。...先生が。」

「なんだと?!」

鳴戸の言葉に、私は仰天した。

これだけたくさん的人数が集まっているのだ。本当に全員におごるとすると...

慌てて携帯を取り出すと、来てもないメールを読むふりをした。

「おお、愛しの妻から『迎えにきてね』メールだ。...じゃ、そういうことで。」

そう言うと、私は一目散に逃げ出した。

—了—

All Copy Rights reserved to Kazura-an since 2006